

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年九月廿八日 印刷納本
昭和十七年九月三十日 發行

（每月一回）
三十日發行

太棹（第百三十九號）

太棹



第百三十九號

持
印

次素本竹の露披打眞



御師匠様の仰せの通り未熟の不束者ながら皆様方の厚きお情けに纏り鳥澁がまししくも眞打御披露をさせて頂きましたことは誠に身に餘る光榮にて唯々此上は藝道に精進仕り奮勵努力いたします覚悟にございますれば何卒く御見捨てなく幾久しく御指導御後援の程を伏して御願ひ申上ます

竹本素次

秋色爽快の好季節御高堂皆々様愈々御清祥の條慶賀の至りに存じ上げます。
 扱て此の度御最負様方の格別なる御後援を蒙りまして門弟素次儀去る九月廿八日飛行館に於て眞打御披露をさせて頂きました。
 何分にも本人未だ藝道未熟者にて御座いますれど此機會に益々奮勵致させ可申何卒私同様いつくまでも御最負御引廻しのほどを備へに御願ひ申上ます

竹本素女

風流・金ぷら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八
 電話銀二〇八

本所區向島須崎町九五

御待合 梅 よし

電話墨田四七五五番

水島春枝

道順 (須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲つて二軒目)

浅草區雷門二丁目一九

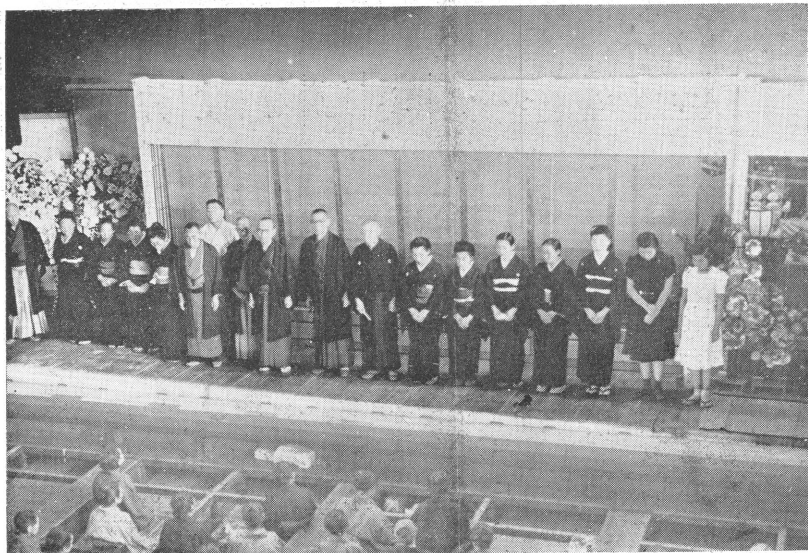
浅草宅 野澤道之助

電話浅草三七九番

席貸 並木俱樂部

浅草・雷門
 電話浅草二二三五番

(場劇岡盛) (二) 善追氏郎次谷田吉



(照參事記號前)

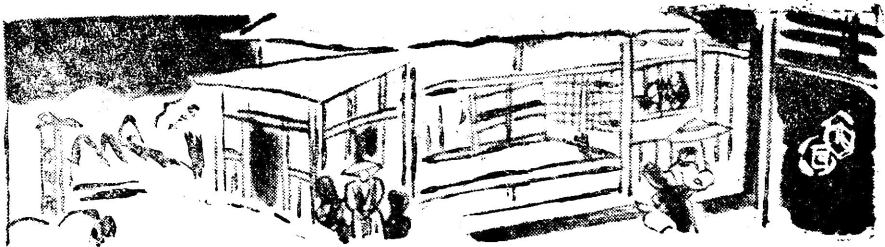
同十九日、廿日兩日は故人郷里盛岡劇場にて開演
 寫眞……向て右より芳子、三喜子、三代子、たき子、愛子、よし子、小松、吉田三芳、細川清、高瀬操、芳田紫交、梅沼稻尾、坂紋、佐々木ツタ子、同カッ子、吉田ヨス子、同ヤヘ子、伊藤一兆の諸氏

(座湊市戸八) (一) 善追氏郎次谷田吉



(照參事記號前)

八月十八日八戸市湊座に於ける吉田三芳氏令弟吉田谷次郎氏の追善義太夫會。
 寫眞……向つて右より光男、愛子、三代子、三芳氏夫人小松、故人末亡人ヨシ子、吉田三芳、阿保文夫、故人友人、波打、石井ヤス、輪島の諸氏



士 河 芳

ふ 戀 を 渡 佐

新潟にて

渡らねばなほ戀し秋晴るゝ佐渡
粟島照れば佐渡は曇りぬ秋時雨
秋の夜の新潟で聞くや佐渡の唄
佐渡を戀ふ港は更けぬ雁の聲
古町の灯に書く秋の扇かな

萬代橋

秋風の佐渡から吹いて橋長き
川口の鮭船まばら朝寒し

吉田にて

西山の黒々と雁夕かな
掛稻の陰の藁家や鶏の聲

彌彦・十寶山

一晴一雨双岳聳びゆ柿紅葉
並ぶ二峰に入日の色や鳥渡る

太 棹 第三百二十九號 目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

口 眞打披露の竹本素次
繪 吉田谷次郎氏追善義太夫會

佐渡を戀ふ 芳河士

- 蟲聲 滋々(一)……………紅雨莊主人(二)
- 我が初秋の歌……………岡田蝶花形(六)
- 文 樂 放 言……………西尾福三郎(七)
- 稽 古 照 今……………西村紫紅(八)
- 太 棹 ある 記……………伊藤紅二(三)
- 大 連 夜 話……………島 東 吉(四)
- 重之助の戀十・東會……………内田三千三(三六)
- 會 報 ・ 消 息……………(四〇)

新京より(益田豊年) 京橋八丁會(原田越巴) 伊豆山
より(徳永靜翠) 伊勢原にて(三並義昌) 大阪より(岡
田蝶花形) 同(内田富太郎) 旭川より(竹澤龜次郎)

太 棹 社 彙 報 ……(三四)



蟲聲 滋々(一)

紅雨莊主人

▽發聲器としての人體の構造を見るに、先づ中心を聲帯に取る。聲帯は口腔と氣管との堺にある分厚な膜であつて、周圍の赤い粘膜に對して、白い色をして居り、左右二枚が水平に開閉するやうになつて居る。そして開く時には其人から見て前の方が一番廣く開き、楔形の二等邊三角形の穴があく。聲帯の振動と云ふのは、上下にぶる／＼動くのではなくて、水平に延びたり縮んだりするのである。

▽聲帯がかく振動すると、其振動につれて、ボン／＼蒸氣の煙のやうに、兎の糞のやうに、空氣の小さな塊りが次々に送り出される。其塊りが周圍の空氣を叩いて丁度池の中に小石を投げ込よように、波を起すのが音波であり、これが人の耳に聞こえるのが音聲である。

▽音聲は音波によつて人の耳に傳はる外、口腔から顎骨を通して、自分自身の耳に聞える。これが天狗病の原因であつて空氣を通して人の耳に聞こえるのと、顎骨を通して自分の耳に傳はるのとは、第一音色が違ふ上に、音響は巨離と共に、

たもの、即ちテの生み字エが鼻へぬけてティンとなり、もとのエに返つて、其時これ亦有名なる「轉訛の方則」によつてネーとなる。好き厭ひは別として、扱としては適法なものでこれがいけなければ、南無阿彌だん佛などは沙汰の限りとなる。無論濫用の悪い事はテンネに限らぬ。謡曲では「のみ節」とか云ふさうで、生み字の如何に拘はらず「ヌ」になるらしい。送りで「奥へオー」とか「ン」とか云ふのが發聲上氣になる人は、こんな例もあると、御安心あつてよいやに思はれる。

▽口蓋の中には御承知の通り舌と齒がある。聲帯の振動が口腔や鼻腔で擴聲共鳴する迄は普通の樂器と同様で、ビーとかブーとか云ふ音響に外ならぬ。この音響をイとかロとかの言葉にするのが舌と齒と上顎(上口蓋)との役目である。即ち舌が齒と上顎と組んで色んな空洞の形をこしらへ、こゝへ息を通すと、ビーブーはイーロー等々となるのである。知るべし「ロ」の大切な事。

▽いくら喉で工夫しても、開合が悪いと言葉の綾が分らぬと云ふのは右の理由による。聲帯は笛であつて、笛以上のものではない、笛の音が言葉になるのは口なのである。此事開合のよくない太夫に教へる。開合々々と八釜しく云ふのは單なる云ひ傳へや此藝の約束ではなく、かく科學の上の理由があるのである。

空氣其他の障害物に吸收されて小さくなるから、大きなよい聲だと思つたのは案外小さな變な聲だつたり、ことにキバルと噪音が多くなり、噪音は振動が不規則で、波型が反覆型でないから、早く吸收されて遠方へ届かぬ。稽古場で破鐘のやうなキバリ聲の大音が、場所であつたらぬのはこれである。顎骨に音聲が傳はつたらぬ鼻が高くなるのか、其邊はまだ研究してない。

▽聲帯の直ぐ上は喉頭で、それから咽頭といふ食道の入口があり、そこから先が口蓋で、これらは聲帯なる發音器に對して擴聲器、即ち喇叭の役をして居る。喇叭は更に鼻腔といふ思つたより大きな空洞のある共鳴器に連つて居り、この共鳴器は薩摩琵琶、ことに女流の鼻聲演奏には喇叭の方よりも一層愛用されて居るやうである。義太夫でも適宜活用されて居る事御承知の通りで、ナ行と、マ行と、ガ行鼻音と、ンとの外鼻は使はぬなどと思つたら大間違が起る。有名なる「テンネ」も此種の活用の一種であり、詳しく云へば生み字の鼻へ抜ひ

▽空氣を聲帯に送る鑪は肺である。肺活量の大きいのが空氣も多い事申すまでもない。肺活量には肋骨を動かす筋肉の縮力と横隔膜の伸縮力とが決定的のものと思はれる。これらが自由に働く爲めには、肩や手の筋肉が堅くつばつてゐてはならず、胃や腸が一杯でも動きが取れぬ。下腹に腹帯をするのは右の伸縮力を加へる時の支柱になるのであらう。

▽これら諸機關の活動を看管するのが「耳」である。耳の役目は音の高低大小長短を聞き分ける審判官であるが、音楽の上では審判官以上のものであり、統率者、指揮者、或はそれ以上のものである。人形の動く目、動く手足に對する、人形遣の目が、音曲に對する耳である。生れついて耳が聞こえぬと、自分の出す聲が聞こえぬから生れたまゝで一向發達せずこれが「聾」である。耳は聞こえても、發達が不十分で音の振動數に鈍感であり、高いか低いかわく聞分けられぬのが所謂「調子外れ」である。調子外れの人も、人の調子外れは分るし、中には自分の外れるのが自分で分ると云ふ悲惨な人もあるから、これは耳の發達が不十分といふよりも、寧ろ自分の聲が口蓋から内部的に鼓膜に達する場合に何か機能障害があるのかも知れぬ。若い時にはさうでもなかつたが段々外れるといふのは屢々不攝生の結果であり、老年になつて外れるのは耳の動脈でも硬化するものであらう。調子外れでも何でもなくて、音のよい悪いや、節抜ひの巧拙などの分らぬの

が所謂「音痴」で、耳の聾と音痴とは目の盲と色盲とに當る事申す迄もない。音痴と迄は行かぬが、極く僅かな音の高低や味が分らぬのが所謂「音感」が悪いので、言葉の與へる感じに鈍感な「語感」の悪いのと對立して居る。音感と語感とは生れつきもあらうが、修業によつて進歩するらしく、この二つの悪い批評家などにかゝると藝は變な所を賞められたり、妙な所を悪く云はれたりして面喰ふ計りでなく奇異なる質問や無體な要求を受けたりして尠からず迷惑するものである。藝を覺えるといふ事も、記憶力といふよりも、この音感語感の鋭さと、節や曲の構成を分析して掴まへ所を見出す頭のよい悪いであり、藝をする巧拙も、器用無器用と云ふよりも、同じく聲や調子の變化異同の特徴を掴む耳と、情趣なり意義なりを正確適切に把握する頭の問題である。音曲は頭であり聲は道具である。そして其道具が適切に使はるゝや否やを判定するのが耳である。頭は何事にも通じるから、耳からが音曲の本當の領域になる。頭と云ふ最高指揮官の作戰通りに、耳と云ふ部隊長が、喉だの口だの鼻などいふ兵隊を指揮するのである。耳の重要な所以、そして、練成に年數のかゝる所以。

▽音の高低は振動數の多少により、振動數の多少は聲帯の緊張度による。ピンと張る度合により、強く張れば高く、弱く

の音波の組合せが人によつて皆違ふので、聲が皆違ふ事になる。それは恐らく、聲帯の質、口腔其他の形状、等によるのであるべく、自然親子兄弟の聲が似たりする遺傳關係も説明出来るのであらう。口構への巧拙、習慣、個性等の影響する事申す迄もない。銘々の持前の聲で藝をする意味はそこにあるので、藝術が人や物の眞似でなく、其人の全人格の成形の表現であるとすれば、當り前の事になる。

▽人間の聲の内、樂聲には樂音が多く遣入つて居り、話音には噪音が多く遣入つて居る事も申す迄もなからう。そして母音は性質上形波が反覆型で樂音に屬し、子音は波形が不規則で噪音に屬する。樂音は振幅が狭くて耳に軟かに、振動が規則正しく反覆するのでよく届く。噪音は振幅が廣くて耳に強く響くが、振動が不規則だから速に消え、遠方へ届かぬ。オイと呼ぶ時知らずく樂音を使つて居るのは、實驗上それがよく届くからである。日本語の子音は外國語のやうな純子音では無く、母音と組合つた復合子音であり、従て噪音が少なくて樂音の要素が多い。例へばク、ツ、チなどは純子音たる K, ts, ch ではなくして、これに母音の「ヤ」の付いた *kyo, chi* であり、東京語の「有ります」の「す」の様に、母音脱落によつて *su* が *s* になるやうな例外を除いては、皆母音がくつ付いて居る。音樂用として日本語が、稀なる優秀な言葉である事は子音の此性質によつても明らかであり、之は

張れば低い事、三味線の糸と同じである。音の強弱は振幅の大小により、振幅の大小は、聲帯を通過する空氣の分量による。笛の音の強弱が吹き入れる息の強弱によるのと同じである。音量は音の強弱の外、主として擴聲關係、共鳴關係によると思はれ、口腔や鼻腔の大小、氣管の状態、ことに胴體も大鼓の胴のやうな役をするに違ひ無い。口腔鼻腔の大小が、中の空洞、洞穴の大小を意味するやうに、胴體の大小も、外觀でなくて中の洞穴の大小、外のみでなくて内のりの問題であらう。従て必ずしも肥瘠に關係はないが、同じ事なら大きいがいよい事、猫よりライオンが大きな聲を出すやうなものであらう。聲帯が如何に強く振動しても、擴聲や共鳴が無くては殆んど聞こえぬであらう事にも注意を要する。

▽人間の發する聲は互に異なつた澤山の音波の束である。單一な音波では無い。一般に音波のうち規則正しい反覆型ものは、耳に快い音で、之を樂音と稱する。不規則なのは、耳に快くない(と云ふ事になつて居る)音で之を噪音と呼ぶ。人間の音聲は澤山の樂音と噪音との合奏である。此事を認識されたい。人間の聲を以てする藝術である以上、純粹な、樂器式音聲は理想ではない。日本人の聲の藝術である以上、西洋人の聲の藝術とは音色を異にして居るのが當り前であり、淨瑠璃で所謂美音計りを珍重せぬのも不思議はない。

私の一言ではない。英語は子音で組立て、母音で窓を開けたやうな言葉であると云はれるさうだが、日本語は、どこもかも開けつ放しの日本家屋そのまゝである。純子音の外國語なら、子音がギクシヤクと固まつたあとを、母音の所で引伸ばさねば節にならぬが、どの子音にも母音を伴ふ日本語ではどの一音も生み字で、伸せば樂音になつて自由自在に節がつけられる。Home, Him, Sweet, Sweet, Home は *ho* と *vee* とにしかが節がつけられぬが、日本語なら *Homu, Suweto* となるから、*no* にも *mu* にも *su* にも *ra* にも節が付けられる。日本語樂には *Harmony* が無いなど云ふ洋樂家も、*Melody* の發達して居る事は認めざるを得ぬのはこれが爲めで、民謡の發達の著しい所以でもある。こんな豊かな、結構至極な言葉を持ち乍ら、流行とは云へ、不自由千萬な外國語向きの作曲を其儘借用して得意がつて居るなどは、いつかも書いたが、餘程どうかと思ふのである。

▽淨瑠璃とは、畿内の話し言葉と、雅俗折衷體の文章語とで出来てゐる文章を、樂聲と活音とで表現する藝術である。淨瑠璃を普通の雅俗折衷體の文章の朗詠と間違へたり、樂聲計りの唱歌だと思つたり、話音計りの話術だと思つたりする所から、奇論怪説が百出する。樂聲と話音、其中間の色々の階段といふ風に、人間の聲の變化を盡して、此優秀無比なる國語で作られた名韻文を表現する藝術は、單に日本曲の司とい

ふ計りでなく、世界に類の無い高級藝術であり、同時に廣さと深さとに於て限りの無い困難な藝だと云へる。かゝる結構至極な代物を、求めて狭く／＼取扱つて、一つ家の節穴から窺いた議論に日を暮らすなどは、これまたどうかと思ふのである。

▽序に、伴奏樂器たる三味線は、絃樂器であると同時に打樂器である。ことに、大きな胴、太い糸、高い駒、重い撥を持つ太掉は、三味線の王であつて、此特性を極度に發達させたものであり、淨瑠璃の要求する有らゆる表現をなし得る資格を持つたものである。かゝる偉大なる樂器の計るべからざる可能性に向つて、四疊半の瓜彈でも聞くやうに、チンとかツンとかいふ方角計りから近づくのは、これまた聊かどうかと思ふのである。

○ 山田 壽 瓢

石井規外先生伊東杖曳徳亡妻の作

月夕花晨五十年 孤筇却恨舊山川
斜陽更添蝴蝶聲哀 一滴淚痕灑浴泉
敬慕技能幾十年 春花秋月似流川
何期邂逅還長別 滿腔欲灑菩提泉

わが初秋の歌

岡 田 道 一

九月十三日第二日曜日のお歌

この日殊に忙がし朝晝夕と三つ會重なりて晝は司會者午前九時早くも到る新宿の驛の待合人は來ぬかも吉岡の彌生の邸の美しや露臺に談ずる國語問題先づわれの收入につき案すると優しき心嬉しや彌生發音の假名のヤヨイも東北の發音に書けばヤヨエかなしも論熱の燃えて二時間息をつく暇なく語る大西雅雄圓タクに軍人會館われら着けば早くも來居る清野教授はビタミンの發見者いとも細々き姿の博士鈴木梅太郎わが友の竹廣のため五十人熱もて集ふ科學者うれし二時半に撮影終りほつとせる暇なく急ぐ東京驛に千疋屋アイスクリームのうまきかも久々訪へる川口の家淨曲の會の相談終へて急ぐ本郷國民保健協會櫻井の省三博士庖丁を自らとりて美味の榮養顔色の艶やかにして八十の老爺と見える櫻井博士午後九時に家に歸りて筆とりて醫界展望原稿を書く竹久夢二 九回忌わが半生夢二がなくて淋しかり夢二は夢二わが友夢二



文 樂 放 言

—— 九月評に代へて ——

西 尾 福 三 郎

盛夏の東京興行を好評の裡に打上げた文樂一座は、八月を地方巡業に費し、九月初旬を一週間足らず京都南座に古靱の紋下披露興行を催した餘勢を驅つて、十月初日に本格興行の蓋を根據文樂座に於て三月振りに開けた譯である。

京都南座は例によつてあの大殿堂が連日超満員の盛況で、折柄冷房禁止の場合に押すな押すなの人いきれで、全く喘ぐ思ひの苦行三昧であつたが、初めの四日をお目見得に次の二日をお名残りに古靱の新口が出たので、一寸き／＼に出かけてみた。珍らしく端場が出てゐて節季候の條りを津磨太夫が語つてゐた。思ひなしか重なる一身上の不幸續きに古靱の面上にいつもの張りが乏しい。語り口に生彩のないのも強ち盛夏に冬場の道行を演ずると云ふ季節違ひの勝手悪さ許りでもないやうだ。清六の絃が、いよ／＼冴えて獨り場内を壓してゐる。文五郎の梅川に榮三の孫右衛門で派手と滋味の對照が仲

々に面白い。右の外に大隅の寺子屋があつて玉造の松王に對し文五郎の千代は格別珍らしくないが、玉助の源藏に小兵吉が戸浪を受持つてゐたのが私としては目新しかつた。この場ではいろは送りを和泉太夫が語つてゐたが、圖らずもこれがこの人の最後の舞臺となつた譯で、番附では九月興行に菅原の車場で松王を受持つてゐる事になつてゐるが、これは出てゐない。かう云ふ事が後日の記録を誤る基となるので爲念附記しておかねばならない。和泉太夫の急逝で又一人重寶な端場の語り手を失つた文樂の現状は將に桐一葉の秋を思はせむものがある。和泉は一向にバツとしない藝風の太夫ではあつたが、その野暮臭いやうな地味な語り口が義太夫らしい趣があつて好感され、私も好意をもつてきてゐた太夫の一人だつた。常盤津や清元をきくやうな變態義太夫が幅をきかせてゐる今日の文樂太夫の中に本來の義太夫らしものを生眞面目に

語つてゐた、この人の素朴な風格を永久に見られなくなつたかと思ふと淋しい。

扱て九月の文楽に筆を及ぼすと、久しぶりの本格興行にも拘らず、ドツシリとした大物が、一つもない事が先づ目につく。次に南部、織、道八、と云つた興味の中心になる人が居ない事も物足らぬ。それは興行上の都合だから致方無しとして、大隅の櫻丸切腹——これも何うかと思ふ——が菅原の三段目の前に車の條りをつける親切があつて、何故茶釜酒を略したか了解に苦しむ。今回は私は古靱の油屋だけしか見てゐないので他のだし物については何も云はない事にする。所で問題は、矢張り油屋であるが、古靱ともある人が、何の爲にこんなものをやらねばならなかつたか、その點が不可解である。或人は打續くこの人の不幸に輪をかけるやうな深刻な語物を受持たせてこの上苦痛のしめ木にかけろやうな残酷な仕打は出来ないから、今月だけはかうした無難な世話物を選んだのであらう。と一廉知つたかぶりに主惱者の親心を付度する人もある。今日迄の古靱ならともかくにも、假にも槽下としてこの人のだし物にすべく油屋と云ふ作品は餘りに低調であり過ぎる。有名な節付の良さとその面白さは又別として文楽作品としては歌舞伎より出て歌舞伎に劣る事數等尠とも今回の如くお紺を最後に死なせないで何の爲のお紺の貞節ぞやと云ひたくなつてくる。それに萬野の扱ひも馬鹿げてゐて

頻出するので閉口してそまゝ退散してしまつた。おすみが下女である事一々説明する迄もなく子供でも知つてゐる。それに榮三郎の使ふおすみが子葉に對し歴な尻目使ひをしたりして全く言語道斷、下女やら其角の妾やら分らぬやうな風俗、振舞と云ひ、何うでも今後の新作上演には歴とした演出家を決めて芝居同様にアンサンブルのある舞臺を見せてほしい。今日の多き間に合せの氣持で取扱つてゐる限り斷じて人形芝居に新作のよいのが出るためはないであらう。

以上今月は落着いて觀賞してゐる餘悠がなかつたので筆の趣くまゝに當り散らしたやうであるが、本誌前號所載齊藤拳三氏稿の末尾の一語にある通り、全く我々筆を持つ者としては今日の如き亂雑な人形淨瑠璃界の現状をみては黙して濟まされない氣持から、止むなく發した義憤の聲として、願はくば三思して考へ直して貰ひたい事柄である。

鸚鵡會を聽いて

宮内ほくる

長き夜や舞臺は小仙の彈語り
眼鏡古りて視度確かならず秋灯

岩次の吩咐で一と腰を喜助に渡してしまつてから喜助と貢が同腹であつた事を思ひ出して岩次に告たり、又夏の夜中人間の血に込つた女中がおゝ冷たと云つたり、全くぞろつべい極まる作品である。が追がに古靱の表現技術の正確さは端役に到るまで、カツキリと浮彫りにされてゐて刺すところがない。清六の絃も凄艶であつた。しかしこの場合は數年以前南座で道八のをきいた事があるが、その時の無氣味さには大部距離があつたやうだ。人形では榮三の貢が珍らしいのと、又別の意味で文五郎の萬野が珍らしい。殊に刀を取返しに喜助を追つてゆくところで、この人らしい大芝居をして受けをねらつてゐるのも苦笑ものである。以上の外に玉造が喜助を使つて人形陣の大顔合せであるが、肝腎のお紺が龜松では徒らに無能を曝露する許りで全く氣の毒にたへない。

最後に西亭新作の土屋主税があるが、渡邊霞亭氏の作品の脱化らしいが西亭野澤吉左今後新作に精進するなら専ら作曲家としてのみ勉強するがよく、斷じて詞と曲を同時にこね合すべからず。須らく文章の事は文章の専門家に一任すべしである。原作に據る脚色だから文章は二の次ぎと考へてゐたら大間違で、文章學を踏まへた正しい文章に立脚して、それからさらに淨瑠璃文章に練り直すのだから並や大低の教養で義太夫文章はかけるものでない事を知るべしである。其角住家の段を一寸きいてゐて、何ぞと云へば下女おすみがやたらに



鐵道省指定
東亞旅行社
元北條 西村銀司
杉乃井龍
知府親海寺電話六三〇、八三八

確か先月のある日の大阪毎日新聞の一面に、名士の感想？として掲載せられた中に、某博士が「稽古照今」の標題の下、簡潔ではあつたが中々有益な辭があつた。私はその博士の御意見を此紙上で敷衍するのではない。唯「稽古照今」の、此標題が直ちにもつて我が義太夫に適用せらるゝ事に於て興味を覺へたまでだ。

即ち「稽古照今」古きを稽へて今に照す、唯古きを古きとして尙ぶのみにあらず今の義太夫趣味家も現代に於てそれを照し合す必要がある事を痛感せざるを得ない、義太夫節といふものが、いと古き歴史を有するは云わずもがな、イギリスのロンドンが未だ森であつた時分に、立派に成長してゐたんだから……そこで私は此古い傳統の淨るりが、元祖義太夫節を創成してから以後幾多の名匠が其節調の完成に努力せられたであらう事に想到する時、又如何に其譜(三味線)の工夫に

義太夫は唯汗をかいて語るのみではない。其汗に先立つて考ふべきは此文章此狀態の表現に何故斯くの如き節を用ひてあるかに思ひ及ぼして欲しいものだ。

一羽の鳥、一片の木の葉にも古來の名人が描いた筆には生命が宿つてゐる如く、必ずや此義太夫節の各節々には作曲家作者演出者の生命が宿つてゐるに相違ない、其生命の極致に一步でも近寄つて行く處に妙處も出れば技巧も表現も等しく良化せられ善化せられて行くであらう、要するに、義太夫節の生命を把握する處脈々として血は通ふのである。故に先づ疑問を起せ、何故此節を此文章に適用したか、何故此節を、此表現法として創作せられたかと客觀的にでもよい主觀的にでも良いから、能く考へて見る事だ。そこにこれまで氣附かなかつた境地が拓かれて来る。義太夫節には他の謡曲や清元常盤津、長唄の如く家元がないのを誇りとしてゐるが、節は嚴然として存在してゐるのだ。唯表現技巧と其心構への如何が藝術としての生命である。聲と三絃は繪畫に於ける筆と繪具である。

彼の小兒の玩具にある「ぬり繪」ですら色彩の配合宜しきを得れば、美しく見へると同じく、それに對する研究方法の如何に依つて楽しむ事も楽しませる事も出來得る。況んや雄渾な大作を再現せんとすれば、そこに大なる心構へと技巧とを要するは必然であらう。一段の淨るりを語るに能く其曲中

專念せられたであらう事を稽へる時、そゞろ胸を打たるゝものあるを禁じ得ない。義太夫四十八節の外に各種の俚謡、祭文、經文、流行歌の節を巧みに採り入れて面白く語るに楽しくせられた苦心は並大抵のものでない事は、誰れもが氣の附く事であらう。私は今日の義太夫趣味家に嗚呼がましくも申上げ度い一事がある。それは此古來の大匠名人が或は作曲家が何故に其文章に應じて各種の節や合の手をつけられたか其眞髓に思ひを致して貰い度い。例へば太功記十段目の「主を殺した天罰」など彼の老母が竹鎗で突かれて悶々苦しみながら光秀を誨ゆる切々の情の中に、チ、ンとハリキリを入れて、主を殺したと云わせてゐる古い名人の意中を酌み取つて欲しいのだ。其他各段各様の淨るりに各種の節をつて、大序は大序、二段目は二段目、三段目は三段目、四段目は四段目と、各風が醸し出されてゐる其根底に今一應の再検討の要なきや

人物の心理を考察し節調の妙を發揮し、恰も其相貌を髣髴せしむる底の演技は並大抵の力では出來ない。

私は義太夫趣味家に勧告するに、一段の淨るりを語るに先づ其本を再三再四讀破せよ、そして語れ、次に能ふべくは、一冊の院本を讀め、そして人物の生ひ立ち性情及其環境の良否を極めよと絶叫し度い。

明治中期？に、岡鬼太郎氏が「義太夫秘訣」といふ冊子を著わされた其文中にも、院本讀破に就て縷々懇切な指導をせられてゐた事を記憶してゐる、「稽古照今」は義太夫趣味家に最も適合した題目ではある。

御禮

東京臨時第一陸軍病院 太棹 第三百三十九冊

東京臨時第三陸軍病院 同 三十冊

寄贈者 (山生) 齊藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈被下候段奉謝候

太棹社



太棹ある記

伊藤紅二

今度、自分が關係します仕事に勤勞者の教育——特に勤勞奉青年、産業戦士の中堅層の練成的教育——のことで今は頭一杯なのですが、其のこみ入つた頭の中へも一抹清涼劑の様なものが必要な様です。それは強ちに、今まで云はれてゐた娯樂だとか慰安だとか云ふていのもでなくても、健全な明日への活力のもとになる精神的なかと云ふ様なものは不可缺のもの様です。

然し、今の私の頭の中はさきほど申しました様に仕事のことで一杯な爲にて、落ちつい、扱て好きな道と云ふ様な餘裕を見出せないの、精神轉換としては外道であつたかも知れませんが、例の「義太夫ある記」を試みたのです。

ところが、これがまんまと圖にあたつて、頗る好結果、仕事の能率を上るは健康にはよいは、知識はひろめたはで一石二鳥どころか一舉にして三得を得たと云ふこの御時世柄にはもつてこいの話になりました。

「草子」には三通りありますので、第一が帝都帝大に所蔵され第二には、中村梅玉氏が所蔵してござる、第三は山東京傳が著した「骨董集」に收められてゐるもの、之は京都の某氏が所蔵してゐられるとか。

其處で、この「かぶき草子」は何時頃出来たものかなど、探索してゐる中に、本筋の義太夫紀行の方が、おるすになりますので、はしよることにしますが、お國のことが、淨瑠璃に作られて人形芝居に演じられたことだけは云つておかねばなりません。

尤も、淨瑠璃の他に説教節と云ふものもあつたのですが、土佐淨瑠璃の「おくに歌舞伎」は之は相當古いものと云ふことです。

土佐淨瑠璃と云ふのは土佐少掾正勝が語り出した一流で、江戸に人形芝居を設けて寛文ごろから盛に行はれたものです。とにかく劇祖としてのお國をしらべるべく、私が東京を去つたのは眞夏も三伏の炎暑、フー／＼と喘ぎにあへぐ八月の上旬でしたが、東京驛を午後の八時發、大阪行き急行で之が大坂で約三十分あひがあつて翌朝の七時五十七分發の大社行き急行に連絡が頗るよいのです。山陰線に急行などははかしい様な氣もしたが、之は御利益いともあらたかな、そしてわが國祖神とも仰がれる大國主命をお礼申す出雲大社參拜の爲めの急行と知れて、はてさてお國はい、星の下に生れ

とにかく、先月の日高川安珍清姫道成寺記行について志度寺、金毘羅生記のあとをさぐつて一應は歸京したが、扱て少々義太夫からは、はづれてゐる様にもみえるけれども、もと／＼が芝居の元祖と云ふレットルをはられてゐる所の「出雲の阿國」の史蹟しらべ。

x

そも／＼、出雲のお國の事を取扱つた物語と云ふのは奈良繪本の「かぶき草子」でありまして、奈良繪本と云ふのは本文の間へ奈良繪と稱する挿畫を入れたもので之には種々なものがありますが「かぶき草子」は「お國」が京都へ出て北野の七本松に歌舞伎の舞臺を設けて菘を演じてゐると其處へ名古屋山三の亡靈があらはれて、お國と舊情をかたりあふ、とど山三の亡靈も舞臺へたつてお國と一緒にをどる——と云つた様なものです。

で、甚だ好事家めくのですが、今日知られてゐる「かぶき

合はせたわいと小膝をうち乍ら、車中の人となる。この列車が、午後四時廿二分に大社へつく。
先づ、大社へ參拜してから、いよ／＼本筋のお國の史蹟をたづねる。第一が、芳の墓所であります。

丁度、大社から移佐の濱へ出る街道の左側の小高い丘の上に澤山の墓の中へはさまれて年を経たらしい古ぼけた置石然とした墓石が一基、丁度、大厦高櫻の礎石の様にもみえます。私はしばし、其處を去りがたものがありました。出雲のお國、そのお國が其處にとことには眠つてゐるかと思へば低回去るにしのびない氣持になるのも無理はないでせう。
或時は遊女となり、又ある時は良人と力をあはせて悪人ばらを滅ぼす所の烈婦となり、色々と演劇史上や劇曲の上では取扱はれて、大名の奥方になるかと思へば一代の淫婦とされたり、到頭、蛇使ひの女とまで作りかへられてゐる史實の上からは滅茶々々のお國です。

その世の毀譽褒貶を他所にしてここに何百年、彼お國は永久にこの石の下に埋もれてゐるのです。

私は妙な氣持になりました。然し、其のあとで、ハットうしろをふりかへつて、道をへだて、海岸よりの山の中腹にあるお國の記念塔——表彰塔のつもりですが、ここでは單に記念としておきませう。——を仰ぎみることを忘れませんでした。所謂「於國塔」であります。

近衛文麿公の揮毫もあり、伊原青々園先生の撰文に市川三升さんの書になる「出雲のお國は大社の巫女にして云々」の一文はお國をして地下に以つて隠せしむるに十分なものがあると思ひました。

大連夜話

島東吉

その一

大連に上陸した其夜、大連劇場で文樂座が興行すると聞いて、私は新橋演舞場の樂屋で南部太夫と「滿洲で邂逅するかも知れない」(本誌第百三十七號参照)と話し合つたことが、遂に事實となつたのを喜んだ。そしてこのことを東京から大連へ榮任された文樂座好きのU博士に語ると、それでは私も同行しやうと云はれたが、計らずも、滿洲大豆化學工業株式會社のM社長に招待されることになつて——二日目(八月廿三日夜)に特等席で觀劇したのでつた。

特等席は十圓五十錢(税共)だが、

各等全部賣切れの盛況から、この特等席を手に入れるには二十圓のプレミアムが附いてゐるといふ豪華さ。尤も菊五郎が

新東京で興行した時には金五十圓也のプレミアムが附いた相で、斯うなると豪華版を通り越して豪華版とも云へやう。さすがに大陸は萬事が大きい。

二日目(二日間の興行だから、千秋樂でもある)の出し物は「太功記・酒屋・安宅關」だつた。南部太夫と伊達太夫の「酒屋」を聴いてゐると、遠い世の浪花情調よりも寧ろ遠い東京の新橋演舞場の雰圍氣を彷彿して、大連に來てゐるのを忘れるやうな望郷的な感情をおぼえるのだつた。

旅興行だからではなく、旅疲れといふ意味からであらうか、南部太夫も伊達太夫も氣力が無いやうな

従つて抒情も豊かではなかつた。同時に人形もおほまかに使はれてゐるやうで、私の眼にしんみりと映らなかつた。いや、さういふ私がまた旅人であるから、落ちついてゐないのかも知れない。

「酒屋」が幕になると、私はさつそく樂屋を訪ねた。南部太夫は私の顔を見るや「ほんまに、おほまきにおほまき」と邂逅が現實になつた悦びで眼や唇を綻ばすのだつた。

——私は安堵した心持で外へ出た。大陸の晩夏の夜空は初秋の氣配を湛えて、青く澄み、その中空に瓦斯燈のやうな十四日頃の月がボツカリ！浮いてゐた。

その二

翌夜から、大連劇場で映畫俳優の川浪良太郎、南光明、筑波雪子一座の實演があつて、それに滿鐵の某氏から誘はれたが、いさゝか恐れをなして遠慮

した。續いて井口靜波、音丸の一座がかゝり、これにも某氏から誘はれたけれど、やはり恐しさから遠慮した。

すると某氏が料亭「淡月」に案内し大連で太棹藝妓として其名を賣つてゐる松助の「三十三間堂」を聴かせてくれた。私には上手下手を聞き分ける耳は無いが、だが、斯うした日本の古典音楽は異境にゐやうとも、いかに初秋の夜を日本的にしみじみとさせたことか。

太棹と云へば、本誌の芳河士主幹に依頼されたことを思ひ出して、翌日、私は美濃町の竹本旭勝師を訪ねた。

その三

お芝居の樂屋氣分の部屋で、折柄來連中の鶴澤清二郎君(大隅太夫の相三味線)を主客として、旭勝師や古川翠香君が恰度夕食を済ましたところだつた。

古川君が「東京で芳河士主幹に會

見たことを話した。旭勝師は、「藝妓衆よりも旦那方に多くお稽古をしてゐる」ことを話した。清二郎君の歓迎淨瑠璃會(常盤町・社會館)の時間が迫つたらしいので、私は「太棹誌を活用して、旭勝師が大連で飛躍する」ことを望んで——階段を下りた。

昔通りの發音

先日聲曲類纂や松の葉の校訂者浦和高等學校教授文學士藤田徳太郎君と、日本國語會を創立するので度々御目にかゝつてる中に、義太夫の話が出た、同君曰く、昔徳川時代の發音は談合は(たんこう)、合力は(くりよく)、群集は(ぐんしゆ)であつたといふ。又昔の「いさ知らず」と「いざ行かん」とでは必ず別に使はれて居たといふ。(今は大衆がいざ知らずとすべてを「いざ」と混同してゐるが)それから推して昔使つた通りの傳統を重んずる方法として、

岡田蝶花形

(合邦) 度々の合力金は「くりよく」金(玉三) 問ひ談合は「たんこう」(鈴ヶ森) 見物群集は「ぐんしゆ」(十種香) 勤する身はいざ知らずは「いさ」がよくばないかと思ふ、現在の人士の頭に入り易い様に一般の慣習に従ふ可といふ中川愛永氏の説は、傳統の破壊であること以外の何物でもなく丁度國語審議會といふ怪しからぬ存在が、字音發音假名遣など、傳統を破壊されつゝある今日一層我等義太夫人丈は昔を守つたらどうであらうか、敢てこれを提唱する。

重之助の戀十

内田三千三

「清麗な女義」……として、玄素から堅實な藝風を論はれてゐる竹本重子が師名重之助を襲名して、二代目披露公演をこの人らしい「壯麗」さで、演町日本橋クラブに公演した。

重之助の藝は「艶美な色氣」と「ふくやかさ」にこそ乏しいが「清冽な澄感」と「鋭美な迫力」があつて「大物」か「子役」の出る語り物が秀抜だ。

前者では「盛綱」「九段目」「河庄」、後者では「先代」「戀十」が特長を鮮

重之助は藝としては描線が正しく、イヤ味な當て込みが少しも無く引締つた清韻がある。堅實な「地力」と「清品」を持つ此の人は何を語つても究々として倦まず眞摯敢闘する。清鋭麗儼な「藝格」に「雄渾な雅趣」が滲じみ出れば堂々たる一藝の人だ。

大切に素女の連れ弾を始め、綾之助小津賀、素昇、住若、清一、紋教、猿玉、土佐廣の女義大幹部總出演の豪華な掛合「野崎」を聴きつつ、重之助の「人徳」と「眞摯な精進」を推想して肅然襟を正した、愚かな冗言かも知れぬが若き女義へ附言したい。

卒直に云つて重之助は「精進努力」の人である。華やかな人氣に育ぐまれバックの良さに引立られて順風満帆、幸運街道を陽進した女義ではない。

秋霜烈日！ 血の滲じむやうな藝苦の果てに克ち得た「今日の榮冠」である。

超満員と残暑の熱氣を忘れさず溢い

出す。

改名公演の「十種香」は……其の意味で一長一短がある、殊に八重垣姫なぞ一滴るやうな優艶「さが淡い爲め姫御前の氣韻は出せても光澤のある柔軟味がモウ一息だ。

ふつくりとした「戀愁」をほの／＼と含む色氣と雅韻が望ましい、その代り藝に「野卑な濁感」が無く清澄な氣韻が貫流する。従つて「お前の姿を繪に描かし」……が清純な思慕を哀美にモリ上げる。

「同じ羽色の鳥翅」……は優艶な愛情の「ぬく味」が淡く「額縁の繪」に似て美しいが靜謐過ぎる。濡衣は薄命な哀れさがしつとりと好出してサラツとした裸に寂しい人柄を漂はす、「女房の濡衣が」……の心韻なぞ清感脈々と深點へ觸れ仄寂しい「諦めの女」を妙出する。

勝頼はデレつかず清品があつて優れてゐる、特に「若し」……で息をつめ

舞臺装置や地味で堅實な演出度も眞摯で好感を抱かせた、藝に生き藝に倒れる一筋な信念のみが「藝術」と「人格」を結ぶ重要なクサビとなる。それこそ不利を忍び苦難に耐へ、光明の彼岸に到達させる烈々たる「藝術魂」である。

幾十年と云ふ長い重子の前名から師名を繼いだ喜びは一人當人の本懐許りでない、其の裏面には「不屈の藝術精神」が浸透してゐる。重子の藝術行路は終つたと同時に二代目重之助の藝術生活は新らしく進發した。師弟相携へて記念舞臺に立つ初代の温顔はフットライトに明るくほころびてゐた。その感動深い喜びの二代目へ送る詞は……「鍊磨終生」である。(九月四日記)

東會

越駒の「堀川」

東會初秋公演は第三日曜の故もあつ

「過やあらんかと」……へ移る呼吸なぞ氣韻高い香りの中に凛美な愁感が籠る。それと「あの泣聲は」……や「ハチ滅相な」……の詞のカカリが「典麗な雅韻」を湛たへて明暗を描き出して行く。

奥庭になると「知らせ度い」……が切々たる憐感が迫るのと、段切れをカッキリ折目正しく語るのが愉しめる。只全體としては惜しむらく「色彩」が清淡な爲此の作特有の「濃美な詩韻」がかすかである。こう云ふ淨瑠璃には「絢爛たる古典味」と「幽艶な詩韻」がふつくりと漂つて欲しい。

勝八の絃は藝に「透徹した味」があつて無駄がない、スツキリとした深味に男藝を想はせる冴えた心韻を漲らせる、重之助と相俟つて筆者は文樂退京以來久々で「眞實の藝」に觸れたやうな感銘を受けた。

勝之助のつれ弾も緊密に勝八と呼吸が合つて藝感を不統一に仕なかつた。

てか大入で、舞臺、客席、俱に活氣横溢した。番組の夜の部越國駒照の「合邦」から聴いたが眞打の越駒の「堀川」……が印象深い。

越駒の演出は垢抜けて、サラリとした、裸に圓味のある潤ひが内流する。その「練れた巧さ」が此の曲の持つ人情詩を克く描き出す。語り出しの「同じ都を世につれて」をじつくり語つて鄙びた片里の佗しい情趣を浮彫にする。

古雅な香りを持つ情景文の中に登場人物の心理的雰圍氣が滴々と滲じむ。「目さへ不自由な暮しなり」……から「おつるさん嘸ぞ」へカハル呼吸も景文」と「心理」の津々たる脈絡があつて楽しい、人物中では興次郎が好演である。特に「羊かん饅重」……の邊り馬鹿騒々しくならず、タワイない嘘八百の裏に盲母を想ふ眞情がうつすりと流れる、全體に、内証せず放り出して語り乍ら正直一途の善良性を漂はす。

陽氣でゐるとどこか臆病な氣弱さを覗かせる。あれで「おとましい哀れ」さが妙出すれば完璧だ。

猿廻しも技巧が騒がしくならずお俊への心韻が靜密に流露するのも本筋である。

母親は苦心して良く語つた。仄か乍ら粹韻があるのが小瑕だが、泣かそうとせず腹でホロリとさせる技法がユガかれてゐる。「つれなの老の命やと」……で漲らす「衰寂たる悲愁」など無情感が籠つて佳い。

傳兵衛は書置を讀む箇處がツンである。柔らかく艶を持たせてスツキリ運ぶ、その代りお俊は案外生彩に乏しい。サワリにかかると此の人獨得の淡巧さが「深愁」を哀美に描くが前半が平凡だ。

お俊の面白さは「勤めの女」の持つ「深純な愛情」にある。生娘にも優る男を想ふ真情が幽婉に内炎して欲しい。「世話しられても恩に着ぬ」……の

女房心が深有されねばならぬ、越駒はお俊よりも「興次郎」と「母」に藝力を集中させる。「アイトと返事もしほく」と「……や「聞く程迫るお俊が胸」……を省くのも情味を薄めた。サワリへかかる前にお俊の切情を伏線的に藝感させる「拵へ」が淡いのが疵である。

津賀昇の絃は素直な柔か味があつてヂヤカ／＼達者に弾かれるより遙かに心好い。

猿廻しになると流石に、藝の自信が未だ出来ぬか稍内輪につつましくなり過ぎた。「躍動する正確」さと「流暢な詩韻」がありたい。

前半は藝にクセがなく潤ひがあつて持前の素直さがしつとり良出する。殊に「わがみの働きで」……で這入るチンが「間」と「音質」が優く心韻條々と浸透して有望な藝質を鮮感させる。

猿春、三生「寺子屋」奥 堅牢で頼母しい。

松王の泣き笑ひを一杯に演り乍ら「幅」と「深さ」を堪たへ一沫の翳影さへある。只缺點は稽古を格調正しく受けてゐる故か、必要以上に節尻を強くキメつけて語る難がある。

モウ一つ女性表現の詞が、藝がしつかりしてゐる割に小供ばい、清高さを處々露感させるが、當夜の戸浪はそれが可成り是正されてゐた。一體に松王は輪廓が大きく茫洋とした底に「鋭い氣魄」があつて一寸と前進座の長十郎を聯想させる。

源藏は稽書過ぎた、モット落ち付いた「澁い艶」が望ましい。千代は戸浪よりよく真情を波動させるが、かぶり氣味な愁ひをセイブツした方が急所がグーンと引立とう。

三生の絃は堅達許りでなく潤ひが充分利いて良技だつた。「いろは送り」……でも藝をグット結集させて「心の姿」を弾く鋭巧さが滋趣深い。

住若、猿幸「鳴門」奥

住若は豊かな技力を持ちつつも純一に迫つて来る「藝の清澄」さが乏しい。往年の住若は呂昇に似た「艶」と「巧緻な鋭さ」があつたが、復活後この人には「純粹な情熱」が不足してゐるやうに感じられる。「鳴門」のおつるは清らかな素直さが求めたい。

住若のおつるは技巧色が濃厚で「可憐な澄感」が混濁する。若手の女義には到底真似られぬ「巧者な旨味」と「抑揚の自在」さを持ち乍ら藝が「冴えて來ないのは」洵に惜しい。

猿幸の絃は益々「緻鋭な練巧」さを加重して來たがこの日は何故か潤ひが尠なかつた。雄放快速な三生に求めるものは「潤ひ」であり、巧緻麗鋭な猿幸に望むものは「雄渾」さであるのに當夜はそれが演出的に反比例した。われ／＼若輩な鑑賞者にとつて、藝術は「永遠の魔物」である。

文樂座十月興行

文樂座人形淨瑠璃は十月一日初日に四橋文樂座にて開演、本興行より鶴澤觀西翁五十一年振りにて出勤の外今月は野澤吉左の改名披露がある。

伊達娘戀緋鹿子——（お七、重太夫、庄兵衛、住太夫、吉三郎、七五三太夫、下女お杉、播路太夫、越名太夫、呂賀太夫、了稚、彌作、偶若太夫、司太夫）廣助。

出陣（西亭作詞作曲）（呂太夫、織太夫、南部太夫、雛太夫、文字太夫、つばめ太夫。（吉左改松之輔、重造、團六、吉季）清友、一郎右衛門）仙糸道八。

傾城阿波の鳴戸——中（長尾太夫、友平）（伊勢太夫、叶太郎）切（古靱太夫、清六）

本朝廿四孝（十種香より狐火迄）——八重垣姫、南部太夫、勝頼、織太夫、濡衣、呂太夫、六郎、大隅太夫、小文

治、住太夫。謙信、古靱太夫）觀西翁ツレ、寛治郎（友衛門、吉三郎）琴（勝芳）卅三間堂棟由來——切（大隅太夫、清二郎）木遣り（源太夫）（文太夫、雛太夫）（文字太夫、つばめ太夫）（播路太夫、越名太夫、呂賀太夫）（隅若太夫、司太夫）千駒太夫、富太夫、三龍太夫、（新左衛門、清八）猿二郎、八造、團伊三、友十郎、廣二（清友、一郎衛門）團作、清廣（友衛門、吉三郎）（友平、叶太郎）

▽野澤吉左師 野澤松之輔と改名。

松竹白井松次郎會長より松竹の松と松次郎の松との一字を取つて與へられたもの。師は始め和歌山にて故野澤吉造に手ほどきを受け、昭和五年十月故六代目野澤吉兵衛の門に入り、左と名乗り、同六年正月文樂座に入座。吉兵衛歿後七代目の預り弟子として指導をうけ今日に至つたものである。

會報
消息

新京より

益田豊年

(前略)二仲、一昨日千秋樂にて猿之助一行に道八、織太夫の特別参加にて開演、満員の盛況裡に打上げ申候、先月は若手文樂座の來演あり、次いで菊五郎一行來る等、此處演劇陣の來往繁く大に楽しみ居り候(九月五日)

伊勢原座にて

三並義昌

拜啓 愈々御清榮奉賀候陳者過日中老會の松屋ホールに於ける乙女文樂人形入大會に引續き、初の試みとして小生主催致し和田春和氏頭取役、扇之助

益々御清祥の段奉賀候、扱て我々は既に長年月の間、殆んど定期的毎月一回位、伊豆山相模屋の千人風呂に出懸けて、期かなる藝談のうちに、各自一曲宛公演するを樂しみに致し居り候が去る九月十九日、二十日の土曜、日曜へ掛けて、例に依りて相模屋に参り候今回は星野桔梗氏も出席致さるゝ筈にて候處、合惡病氣の爲め缺席致され候事は洵に遺憾に存じ候、而して當日の語り物は左記の通りに御座候
時雨炬燵(相模)杵掛村(子太郎)堀川(其甫)忠臣講釋七ツ目(靜翠)絃(扇之助)

その聴衆は、在宿の客人並に主人濱田氏の縁者の方々にて御座候、斯くして藝談に華を咲かせて、夜の更くるも知らず、頗る和やかなる一夕にて御座候ひき、孰れ其内機會あらば、貴下をも一席御招待申上度存じ居り候、先は右鳥渡御報告申上候

(十月一日)

父君(寅さん事)宣傳係にて一同太夫を名乗つて神奈川縣伊勢原町伊勢原座に於て九月十六、十七日の兩日乙女文樂を招聘の上開催致し候、一圓の入場料にて兩日共大入満員、十七日の如きは全く立錫の餘地なき超満員にて、人形使全員は勿論、太夫三絃共に大人氣を以て勇躍熱演仕り候、今迄ひどい太夫が馬鹿氣た人形等にて入場料を取り一般にインチキ者多かりし由にて、初日の如きは其爲め疑ひ濃厚にて、木戸口にて場内の空氣を覗え、初めて切符を買ふ様な有様にて有之候處、斯かる責任ある連中を以て組織されたる一行の力演は忽ち町内の評判となり二日目の如きは驚く程の人氣に有之その好評は御推察に任せ申候今後は中老會の連中にて毎年一二回づゝ各連交代を以て自己の自信ある土地に於て興行し三身體の義太夫精神普及に相勤め度議案有之、田山吞笑氏早速横濱、横須賀の二市を地盤として引受け、小生は藤澤、

平塚、小田原方面を擔任する事に相成り、將來大に意義ある組織を期待致し居り候、なほ一行は匿名又は本名に因みて太夫名を名乗りしもの候、兎に角入場料を取る事は不合理な様にも思はれ候へ共非常に責任を感じ其熱演振りには又格別に有之候、二日間の番組左の通り、先は旅の空氣一言御報告申上候。
(初日)宿屋(竹糸太夫(竹糸)、和孝)戀十(あるを太夫(あるを)、彌之助)布四(源太夫(吞笑)、絃平)帶屋(和太夫(春和)、絃平)鮎屋(昌太夫(義昌)、扇之助)……(二日目)沼津前(和太夫)同後(柴太夫)絃(扇之助)酒屋(千春太夫(千晴)、和孝)忠四(越太夫(越巴)、和歌吉)寺子屋(昌太夫、和孝)太十(操太夫(操)、綱助)

伊豆山より
徳永靜翠

謹啓 愈々仲秋の候と相成り候折柄

京橋八丁會

原田越巴

埼玉縣久喜町統後奉公會では同町日婦團後援の下に十月六日午後一時より大橋座に於て京橋八丁會連に依り、出征遺家族慰安の義太夫會を催ほした。當日は同町素人連の琵琶、舞踊、小唄浪花節等を以て前座をすませ午後六時より左記番組の通り八丁會連は出演し統後奉公會主事の挨拶があり、午後十一時出演者一同舞臺に整列し聴衆と共に町長代理の發聲にて萬歳三唱、非常な盛會裡に閉會した。

忠臣藏五段目(定九郎、越巴。與市兵衛、新昇、勘平、東好)酒屋(語好)忠四(奇聲)柳(蝶花)帶屋(越巴)先代(東好)揚屋(新昇)大切、千兩職(おとわ、奇聲。猪名川、東好。鐵ヶ嶽、越巴。大阪屋、呼出し、新昇)絃(和歌吉 龜造)

大阪にて

岡田蝶花形

大阪や鳴戸、十種香、柳きくと特急つけるタぐれなるも
新左衛門はじめ九挺の木やり音頭大文樂の目出度打出し
鰻谷の夜ふけ迄食へるコロツケや吉田内田と女義の團秀

同

内田富太郎

甘き作を辛く演る古鞭の鳴門藝闖、五十年の氣魄を十種香に盛る觀西翁の絶艶さ、平凡ながら古味豊流する大隅の柳の香り……旅夜の秋胸に去來します。

旭川にて

竹澤龜次郎

御無沙汰致しました、お變りもあり

ませんか。今度當地の神田館(映畫館)が劇場となるに就きまして八月より増築中でありますが、十月十日開場にて私共一行身振劇家元竹澤龍造一座として江戸川蘭子外一黨と合同の上招聘されまして華々しく開演する事になり、來年三月末日迄當劇場に出演致して居ります。當市は素義も中々盛んに昨年末も朝顔日記と鳴戸の二幕を二日間切幕として出演させて貰ひました處で今後共義太夫界發展の爲め大に精勤致す一念で御座います。

私共一座は竹澤龍富美、龍喜美、二代目龍巴津、龍佐久、二代目龍喜代、龍富士、龍丸、後見龍三郎で御座います。座付太夫は竹澤に二十幾年の長き年月、杖とも柱ともなり良くつとめてくれてゐます竹本綱枝、竹本駒若に竹澤龍吉であります。東京の御連中様の御健勝を遙か北海の雪空よりお祈り申上ます。

▽兜會役員改選 兜會は今回定期總會を開き役員改選左記の通り決定。
會長(近・清華)副會長(桑原美峰)相談役(中澤巴、鈴木和樂、鈴木松寶)顧問(寺岡三幸、本多可笑)幹事長(荒木泉)庶務(藤田其晶)會計(北村三葵)

▽縁會 九月十七日交正俱樂部に開催、寺子屋(ほくら)忠四(一)新口(錦)毛谷村(壽光)絃(團市)

▽十喜和會 創立以來毎月親睦午餐會を開いてゐる十喜和會は本月は十四日夕より上野精養軒にて催はした。

▽三好會 九月廿三日第十三回を相互俱樂部に開催。十種香(喜三香辨慶(三好)太十(津満子)日吉(美昇)忠六(梅聲)柳(巴好、三好掛合)絃(三好、花昇)第十四回(十月廿六日、菊川俱樂部)日吉(喜三香)十種香(のし子)酒屋(聲鶴)柳(巴好)鈴ヶ森(秋子)太十(梅聲)絃(たま子、燕京、三好)なほ同會は今夏江の島へ、十月一日鬼怒川へ

東都五十義會芽出度終了。番付は次號に掲載。

▽女義若女會 東橋亭にて、五十二回(九月十五日)忠六(津賀重、素花)宿屋(素次、素一)寺子屋(素八、播磨)野崎(素廣、駒登久)合邦(彌周、三生)五十三回(十月一日)日吉(津賀重、素一)鳴戸(素廣、駒登久)辨慶(素次、清三)柳(素八、播磨)一)鮎屋(小和光、清三)

▽豊竹猿春秋の小會 十一月八日夕東橋亭にて開催。鳴戸(駒榮、佳世子)寺子屋(佳仙、清二)酒屋(若好巴住太十)越駒、津賀昇(毛谷村(猿春三生))

▽今出さつき氏追善 九月十七日午前十一時より並木俱樂部にて今出さつき氏の追善義太夫會を開催。出演者は喜鳳、巽、旭、吉歌、豊國、扇柳、正鳳、文盛、榮玉、神風、有明、いろは、力、松藤、都、北壽、筑波、呑笑

太棹社彙報

龜鶴、あるを、幸樂、林昇、ひばり、

花房、清、春和、操、桔梗の諸氏。

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催はしの外前書きを略します。番組御送附なきものは記載されなくなります。御諒承を乞ふ。掲載順不同。(太 棹 社)

京濱素義聯盟 秋季大會

國友東光氏を會長として結成されてゐる京濱素義聯盟の第十一回秋季大會は十月九日より三日間毎日正午より大井海岸見番演藝場にて賑々しく開催。五十議會の試演も兼ねて出演者は左記番組通り多數に達した。

(九日) 本下(若狹之助、義昌、三千歳姫、關路。本藏、呂聲。伴左工門、貴昇。綱助)引窓(貴昇、綱助)山別(伊久子、雷糸)野崎(廣司、三昇)鮎屋(春日、雷糸)壺坂(富枝、森本)合邦(壽聲、文昇)日吉(美竹、雷糸)毛谷村(吾樂、昇之助)鳴戸(美幸)朝見太夫) 四 駒

司、昇之助)逆槽(雅樂、綱助)太十(呂聲、朝見太夫)寺子屋(さ章、とり子)安達(義昌、綱助)合邦(淑登、昇登)大晏寺(桔梗、綱助)……(十日) 鳴戸(お弓、美幸。お鶴、清子。森本)太十(さ章、清子)十種香(國代、新造)鮎屋(とみ子、歳太夫)柳(久松、新造)日吉(三車、重之助)先代(小柳、新造)寺子屋(ほくら、團市)紙治(叶昇、新造)鮎屋(二葉、重之助)八陣(登盛、新造)沼津(靜壽、團市)沼津(あづま、重之助)新口(錦、團市)沼津前(宇都々、新造)同奥(共樂、新造)志渡寺(登龍、團市)十

種香(吳羽、米翁)陣屋(吳光、新造)忠六(古清、雷糸)赤垣(叶、扇之助)日吉(盛鶴、新造)本下(呂聲、とり子)……(十一日) 太十(光秀、久吉、貴昇。十次郎、東光、初菊、義昌。さつき、呂聲。操、さ章。森本)朝顔(美幸、朝見太夫)辨慶(義昌、和孝)寺子屋(喜照、綾之助)先代(豊國、絃平)鮎屋(正鳳、道之助)鳴戸(佳津子、綾之助)野崎(喜鳳、道之助)安達(一廣、綾之助)伊賀(五都、絃)菅(四)一朝)市若(淺路、綾之助)油屋前(司、猿女)同奥(柳正、猿女)伊賀(五)旭、道之助)梅忠(六)花、清(陣屋(巽、絃平)新口(清十、朝見太夫)布四(呑笑、絃平)沼津(東光、森本)合邦(十三三、綱助)

新潟第一劇場に於ける 正義座の盛況

今夏越後新發田、水原等にて大好評を博した向、墨聲會の有志は今回又々一座を組織し、正義座の名の下に各自太夫を名乗り十月七、八兩日新潟第一劇場に於て左記番組の通り華々しく開催。伊宮、石黒氏を始め花柳界の應援に聴衆は定刻前より劇場に押しかけ七時には木戸 切の盛況を呈した。

(隨行記は次號に掲載)
(初日)鳴戸(春榮)陣屋(國太夫)大文

大阪・京都・九州・岡山・東京

聯合義太夫大會

大阪八千代會、東京九重會の姉妹會の今秋合併大會は東京方の當番にて、今回は京都、九州、岡山の巨頭重鎮を

字屋(八雲太夫)合邦(益太夫)佐太村(うつろ太夫)大切、野崎(久作、八雲太夫)お光、益太夫。お染、うつろ太夫。久松、母、國太夫)……(二日目)壺坂(春榮)本下(國太夫)儀作(益太夫)沼津(八雲太夫)忠四(うつろ太夫)大切堀川(與次郎、八雲太夫)お俊、うつろ太夫。傳兵衛、國太夫。お鶴、春榮母、益太夫)絃(和孝、龜造)

迎へ大聯合大會を催ほす事になり、各關係者は豫て協議中の處愈々出演者の類ぶれも決定し、八幡の大彌、岡山の

古城、長登、京都の出雲、タツミの諸氏に大阪方は鶴峰、槽、信濃、和風、まつ尾、利生、東京では桔梗、清雀、紅司、千鶴、巽、操、美峰、子太郎、隅斗、香良花、巴、清華、千晴、平茶(以上順不同)の諸氏にて十月六、七、八の三日間午前十一時より並木俱樂部に於て華々しく開催する事になつた。三日間の番組左の通り。

(初日)沼津(桔梗、綱助)安達(清雀、辰六)組打(大彌、勇造)忠四(紅司、綱造)彦山(鶴峰、友造)先代(千鶴、猿平)鳴戸(槽、友造)……中入……陣屋(巽、絃平)志渡寺(古城、長之助)鮎屋(操、道之助)合邦(長登、長之助)引窓(出雲友造)新口(美峰、猿之助)岡崎(信濃、稻丸)

(二日目)佐太村(千鶴、猿平)大疊寺(和風、稻丸)竹中(子太郎、綱造)玉三(まつ尾、未定)合邦(出雲、友造)新口(操、道之助)寺子屋(信濃、稻丸)中入 鮎屋(隅斗、綱造)勘助住家(大

彌、勇造)忠九(紅司、綱造)陣屋(タツミ、友造)堀川(香良花、三福)壺坂(利生、小住)合邦(巴、猿藏)

(三日目)乃木將軍美談(清華、扇之助)岡崎(隅斗、絃平)寺子屋(古城、長之助)柳(美峰、猿之助)陣屋(長登、長

竹本素次眞打披露會

竹本素女門下竹本素次は今回眞打となり、九月廿八日午後五時より飛行館に於て師匠素女は門弟の爲め序席を語つて花を持たせ、左記番組の通り賑々しくその披露會を催ほした。

蝶八(素女)新口(文昇、猿昇)辨慶(素廣、駒登久)沼津(素八、播磨)重

の井(小津賀、紋教)山名屋(若好、巴住)先代(重之助、勝八)質店(土佐廣、綱助)合邦(素昇、猿玉)……壺坂(素次清三、ツレ清二)大切、安宅(辨慶、素廣、義經、小素、富樫、素八)絃(清一清三)

善義太夫大會が催ほされた。

東華氏は、初め竹本津賀太夫の蓄音機が動機となつて義太夫熱が上がり、その音譜の稽古から愈々本格的見臺に向つて精進し、各席へ出演を始めたのは明治の終りから大正へかけてであつたが、當時賣出しの杉會、叶會などに拮抗して東華會を主宰し、優秀なる會員を傘下に集め、氏の徳望と大なる犠牲は一躍帝都の人氣を掌握し、斯道に裨益する處實に古今未曾有にして、丸の内有樂座に於ける東華會百回記念の如き古老の語り草となり、その豪華さは想像にも及ばぬものがあり、東西を通じて斯界を風靡し、名實共に素義の代表といふも過言ではあるまい。なほ當日の大切には故人の最も寵愛せられし小倉華子嬢の舞踊があり一層追悼の意を深からしめ、千僧萬僧の讀經にも幾倍勝る供養であつた。

初手向、大正花吹雪名集(東華氏作曲)小津賀(絃、米翁、ツレ、紋教、

小倉東華氏 追善義太夫大會

小倉東華氏逝いて一年、その一週忌に相當する十月廿三日午前十時より、

日本橋俱樂部に於て小倉家を始め舊知の人々に依つて、近頃になき盛大な追

三生、津賀昇(手向草沼津前(光樂、猿之助)同奥(市菊、猿藏)忠四(判官、米翁。由良之助、桔梗。石堂、殿母大夫藥師寺、文久。力彌、卯太夫。郷右衛門、がん昇。諸士、其柳。顔世、糸三紋左衛門)日吉(美福、素昇)朝顔(一義播磨)一佐太村(武市、猿三郎)鯉谷(銀

水、猿藏)陣屋(千晴、團市)阿漕(春相絃平)鳴戸(吳羽、米翁)太十(巴、猿藏)堀川(與次郎、美峰。お俊、三芳。母、桔梗。傳兵衛、三幸。お鶴、操。猿之助、ツレ、松四郎)白石(和風、染登)日蓮記(潮、米翁)橋本(操、道之助)忠九(千鶴、猿平)河庄(清、道之助)油屋

(とをる、紋左衛門)大切舞踊、娘貞勤樽緋鹿の子(お七、小倉華子事若柳花佑、お杉、吉右)人形遣(吉佑、吉英治口上、吉佑郎)淨瑠璃(巴太夫)絃(猿三郎、扇之助)はやし(梅屋勘兵衛社中)

德島縣 出身在京素義公演

八月郷里阿波に遠征し、郷土藝術阿波人形を使用して出征遺家族慰安の淨瑠璃會を催ほし大好評を博した德島縣出身在京素義會は左記番組に依り十月四日午後三時より並木俱樂部にて第二回公演會を開催。

太十(萬樂、團市)酒屋(語好、和歌吉)合邦(登龍、團市)赤垣(美保、若千代)寺子屋前(ほくろ、團市)同奥(松濤、紋教)新口(錦、團市)鳴戸(豊、巴住)忠四(千晴、團市)橋本(操、道之助)

女天會秋季大會

東都女流素義を以て組織されてゐる女天會は、第五十四回

坂東勝治一座身振劇入

東都素義會

久しく新潟、富山地方を巡業してゐた坂東勝治一座を迎へ十月六日より三日間毎日午前十一時より並木俱樂部に於て東都素義大會が開催された。番組左の通り。

(六日)合邦(喜誠、猿喜知)儀作(いろは、扇之助)太十(喜勇、勝助)佐太村(喜香、猿喜知)本下(里芳、勝助)紙治(彌聲扇之助)陣屋(三峰、猿三郎)……(七日)毛谷村(壽光、團市)玉三(喜城、素八)忠四(喜香、猿喜知)十種香(吳羽、米翁)鳴戸(豊、巴住)辨慶(美尚、美之助)寺子屋(義昌、綱助)……(八日)鮎屋(歸世花、團市)先代(綱菊、綱之助)辨上(喜誠、猿喜知)儀作(喜香、素八)合邦(三玉、勝助)寺子屋(一、團市)太十(義昌、猿三郎)

婦人 鳩美會生る 素義

帝都女流素義團としては女天會があるが、こゝに又一つの婦人素義「鳩美會」といふ鳩のやうな美しい會が誕生した。趣旨の一部を掲ぐれば「銃後の女性は一層心をひきしめて自分の誠を盡さねばならないと存じます。就きましては明日の備へに健全娛樂も亦必要かとも存じ、此度鳩美會と云ふ婦

秋季大會を十月三日、午前十一時より、並木俱樂部に於て開催。

野崎(久作、叶昇。お光、登盛。お染、里芳。久松、以與子。母、叶。およし、喜香)絃(猿喜知、ツレ扇之助)長局(叶龜造)先代(里芳、勝助)寺子屋(登盛、新造)玉三(喜らく、勝助)寺子屋(一光、扇之助)儀作(喜香、猿喜知)又助(茂玉、扇之助)陣屋(歸世花、團市)宿屋(佳津子、綾之助)合邦(おそめ猿昇)……(舞踊土橋(果、叶。與右衛門、きよし)壺坂(以與子良造)鳴戸(春子、龜造)山名屋(芦鶴、仙十郎)安達(歌子、勝助)新口(叶昇、新造)夕顏(榮子、仙十郎)八陣(扇華、扇之助)酒屋(小六、松四郎)合邦(翠松、新造)大切、阿古屋(阿古屋、叶。重忠、扇華。岩永、喜香。榛澤、叶昇)絃(扇之助、三曲、猿喜知、ツレ、美之助)

人素義の會を結成いたしまして皆様と共に名前の通り鳩の様な美しい御交りを致したいと存じます。然しこの道にはまた幼稚園の者ばかりで御座いますか何卒御教導の程御願ひ申上ますといふ會名に應はしく又奥床しい結成の辭である。十月十二日正午より並木俱樂部に於て開催。

橋辨慶(以與子、里松、君光。良造、好造)日蓮記(糸樂、語左衛門)鳴戸(昇華、昇登)壺坂(里松、良造)朝顔(小たから龍太郎)山名屋(龜好、好造)先代(以與、良造)太十(老松、團七)松王郎(千歳、絃平)中將姫(藤仲、團龍)竹の間(知恵子良造)柳(菊水、絃平)鮎屋(佳津子、綾之助)又助(君光、良造)宿屋(芦鶴、仙十郎)寺小屋(たから、龍太郎)赤垣(歸世花、團市)大切、後援男子部掛合、太十(光秀、久吉、一。十次郎一樂。初菊、みなと。さつき、團鳳。操、松美。良造)

素義新養精會

養生會、共精會、西日本會の三審查會が合併をして「新養精會」となり關係審查員諒解の上新たに審査員をも加へ、伊東柳平、豊澤團友、鶴澤勇造、澤田金聲、西村紫紅、奥田利生、吾孫子槽、三木金星の八氏審査の下にその第一回を十月十七日より五日間毎日正午より中津市蓬萊觀劇場に於て華々しく開催。大關賞には東大關に豊竹古靱太夫、西大關に鶴澤友次郎揮毫寄贈の優勝旗を授與し、外高齡、三役、婦人優勝

吉岩吉佐麻荒澤和三増増乾橋平歸岡野星淺錦金細藤橋平齋木寺奥坂
良木川久田木部田浦田田 本井山島野田 田川田本井藤村岡村本
蟻義喜喜ら少其金鏡喜喜桔掬軌世 貴桔奇錦金 三三 山か三三
若雀照勇くエ角鳳鳳香城梗月外花岡昇梗聲松鳳清壽司榮生え幸玉を
氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

高永西打濱倉田山花菊三龜伊小鈴須村吉池北野横吉高岩西保壽三山
野内矢口田口田房地口田藤原木田上田田村口井田 田村菱坂並田
神昭晋秋司司壽榮秋松松松松松美津三三三三三三三三三三三三三三三
靜風平水華樂重瓢蝶月藤花鶴樂寶義豆芳園葵と由句換成史曲鳳昌昇
氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

横下船大紳大岡阿米 仁德三江時沼富的井佐近白松魚池桑福平高武
濱關橋垣戶阪方兼杉 木永浦原田井岡野上藤江井岡綺田原安山品笠
和保川吉岡氏西兼杉 翠靜屬清靜盛生關聲清清清里 美美美瓢平一宏
田良奈部十田鶴西廣陶 松翠華昇史鶴昇路鳳司華華雄福尚峰登茶重亮
朝鳳司公源峰紫玉岳 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

同氏に謝す。 田中の誤りにつき訂正 山田都十氏とあるは

北	京	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
關	岩	片	佐	宮	飯	柳	西	栗	久	渡	山	森	加	古	田	傍	國	田	小
崎	崎	橋	藤	川	原	原	栗	栗	栗	邊	邊	本	古	古	島	島	島	島	島
長	山	國	和	は	自	安	貝	錦	田	正	梅	壽	大	美	紀	鳴	集	榮	香
門	彦	榮	聲	め	樂	樂	湊	昇	保	勇	笑	魁	松	彌	德	鳳	門	樂	玉
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏